

ラーマ神、ダルマの具現

アルカ・ジェイン

ラーマは、私たちがシッダ・ヨーガの道においてナーマサンキールタナの中でしばしば目にするサンスクリット語の神の名前の一つです。お祝いやサツツァングでは、神の恩恵を呼び起こし、保護が与えられるよう、この神の本質である愛の体験へと私たちの心が開かれるよう、ラーマ神の名前を呼び掛けます。ラーマは神の名前であると同時に、私たち自身のまさしく大いなる自己である内なる神聖さに対する名前でもあります。

私はインドのデリーで育ちましたが、幼少期のラーマ神の記憶は、行く先々、ほとんどすべての会話の中にこの名前が聞こえたことです。歓迎の言葉として、通り掛かりの人との素早いあいさつとして、歓喜や幸福の瞬間に、そしてまた悲しみや絶望の時にも、人々はラーマ神の名前を使いました。ある人はヒンディー語で「ジェイ・シュリー・ラーム(シュリー・ラーム万歳!)」あるいは「ジェイ・シヤー・ラーム(シーターとラーム万歳!)」と言い、また別の人はシンプルに「ラーム・ラーム」と言いました。私のお気に入りには「ジェイ・ラーム・ジー・キー(ラームに勝利を!)」でした。ラーマ神の名前はインドの文化的モザイク画の中に複雑かつ密接に織り込まれています。なぜなら、ラーマ神を呼び起こし続けることはネガティブなエネルギーを退け、吉兆をもたらすと信じられているからです。

ラーマ神は、ヴィシュヌ神、宇宙の維持者の7番目の化身、生まれ変わりです。故に、善を守り、悪を破壊し、この世界に秩序と正義を再構築するために人の姿となって現れた至高の存在です。ラーマ神は、マリヤーダー・プルショートタマ、高潔な生き方である「ダルマの支持者」として崇められています。

ラーマという名前は、「穏やか」「落ち着かせる」「喜ぶ」そしてまた「幸せにする」を意味するサンスクリット語の語根、ラームに由来します。ラーマ神は、ラーマチャンドラ(月のように輝いてい

る)、ダシヤラタ・ナندان(ラーマの父であるダシヤラタ王の喜び)、そしてラーガヴァ(ラグ王朝の出身である)としても知られています。ラーマ神は、この神が体現した美德、つまりダルマ、勇敢さ、騎士道精神、忠誠心、慈悲、愛、従順、勇気、中庸ゆえに、愛され、敬われ、崇拝されています。インドの多くの人々にとって、ラーマ神は理想的な人間が持つ特質を体現しているのです。

偉大なサンスクリット語の叙事詩『ラーマーヤナ(ラーマの旅)』は、賢人ヴァールミーキによって書かれ、ラーマ神の一生を物語っています。『ラーマーヤナ』は世界の文学の中で最も長く最も古い大作の一つで、トレーター・ユガという、インドの伝統的な時間の計算法による第2時代の出来事を語った、ほぼ 24,000 に上る詩節から成っています。

ヴァールミーキの『ラーマーヤナ』は、インドの伝統的な教典の言語であるサンスクリット語で書かれています。16 世紀に詩聖ゴースワミ・トゥルシーダースが、このラーマ神の一生の物語を一般人に理解しやすくするために、アヴァディー語というインドのウッタル・プラデーシュ州の言語で再話しました。トゥルシーダース版は、『ラーム・チャリトゥ・マーナス(ラーマ神の功業の湖)』という題名で知られています。

『ラーマーヤナ』全体を通して、私たちは神聖な美德を体現するラーマ神の揺るぎなさと、すべての行動においてダルマを順守する、この神の絶対的な献身の実例を読むのです。

ラーマはアヨーダヤの皇太子でありながら追放されます。なぜなら、ダシヤラタ王の一番若い王妃が彼女の息子を王位につかせたかったからです。このため、ラーマは妻のシーターと弟のラクシュマナを伴い、森の中を放浪しました。14 年間、悪魔に苦しめられ迫害されていた苦行者たちに保護と安心を与えながら、ラーマは質素な暮らしをしました。ラーマの功業の頂点は、悪魔の王ラーヴァナを打ち負かしたことでした。ラーヴァナはシーターを誘拐し、ランカの王国、インド南岸の孤島へと連れて行ったのです。邪悪の具現であるラーヴァナは、ダルマ

の真逆でした。この英雄的行為の中で、ラーマはハヌマーン、猿の軍隊の指揮官に助けられました。ラーマの熱心な信奉者となったハヌマーンは、奉仕と忠誠心の典型であり、主君に寄り添って正義のために戦うためには、喜んでどんなことでもするのでした。ラーマ神とその仲間は、妻を救い長年の追放を終え、アヨーデヤーに帰還し、そしてそこで、歓喜の中、ラーマは王位につきます。ラームラージャ(ラーマ神の統治)は 11,000 年続いたと言われ、それは美德の永続的な統治の象徴です。

ラーマ神は、インドのさまざまな喜びあふれる祝祭を通して、崇拝され祝われています。

ラーム・ナヴァミーは、グレゴリオ暦の3月あるいは4月に当たるインドのチャイトラの月、新月より9日目に行われ、ラーマ神の誕生を祝います。この日、信奉者たちは寺院を訪れ、シュリー・ラーマの物語を読み、朗唱します。盛大なごちそうでその日を締めくくる前に、断食をする人もいます。

ダセーラは、9月から 10 月頃、ナヴァラトゥリーの祝祭直後、インドのアシュウィン月の 10 日目に行われる祝祭で、ラーマ神がラーヴァナに勝利したことを祝います。これは善の悪への勝利を象徴しています。ダセーラの間、10 の頭を持つ巨大なラーヴァナの人形が、爆竹をいっぱい詰めて、インドの至る所に立てられます。暗くなると、ラーマの扮装をした役者がラーヴァナを弓矢で射る見世物を見物するために、多くの観衆が集まります。人形は爆竹の騒音と人々の歓声に包まれながら燃え尽きます。ダセーラを迎えるまでの数日間は、ラームリーラーという『ラーマーヤナ』の舞踊劇も上演されることが知られています。子どもの頃、さまざまなラームリーラーの作品を鑑賞できる一年のこの時期を心待ちにしていたものです。私たちは、ラーマ神の勇敢で慈悲深い行動に魅了されたものでした。私たちは幼かったけれども、ラームリーラーは正義の道に情熱をもって従うことを教えてくれたのです。

ディーパーヴァリー、「光の祝祭」は、ダセーラから 20 日後、インドのカールッティクの月の 15 日目に、ラーマ神がアヨーデヤーに勝利の凱旋をしたことを祝います。ラーマ神は夜に到着し、道はディーヤー、「ギーのランプ」の列でともされました。ディーパーヴァリーは、光が闇に打ち勝つことをたたえています。この日、人々は家を掃除し、朝に香油で沐浴(もくよく)をし、新しい衣服を身に着けます。友人や隣人たちと分かち合うためのたくさんの種類のおいしい料理を準備します。このお祝いで重要なことの一つは、ディーヤーをともして家の中や周りに置くことです。夜になると、人々は屋外に集まってあいさつを交わし、爆竹を鳴らします。私は、爆竹の大きな音が魔よけになるのだと祖母が言ったことを思い出します。今日でも、私の住むカナダのモントリオールでは、そのお祭りの頃になると、友人の多くはアカンダ・パスという、『ラーム・チャリタ・マーナス』の途絶えることのない朗唱を行います。この 24 時間にわたる朗唱の間、友人たちと私は、順番に特定の部分を特定の時間に朗唱します。私たちの間で、昼夜にわたって継続的に教典の全体を朗唱するのです。

シッダ・ヨーガの道では、私たちはラーマ神の名前をチャンティングし、同時にこの神が良い例となって示した神聖な美德を培うよう励まされます。私が今でも思い出すのは、1989 年に初めてシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムを訪れた時、「シュリー・ラーム・ジェイ・ラーム、ジェイ・ジェイ・ラーム」と、神の名前がアンナプールナー・ダイニングホールでチャンティングされていたのを聞いたことです。ラーマ神の名前がそれほどの敬愛を込めてチャンティングされているのを聞いたその瞬間、心の奥深くで、私は家に帰って来たと知ったのです——ラーマ神の美德と同義である道に導かれたのだということを。

ジェイ・シュリー・ラーマ！